２６

氏　　名	河原　清志
学 位 の 種 類	博士（異文化コミュニケーション学）
報 告 番 号	甲第４０４号
学位授与年月日	２０１５年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	翻訳等価性再考 ―社会記号論による翻訳学のメタ理論研究―
審 査 委 員	（主査）鳥飼　玖美子 小山　亘 水野　的（青山学院大学文学部英米文学科教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（1）論文の構成

第 1 章　序―翻訳研究における等価概念再考の必要性
1.1　研究の目的
1.2　研究の背景、意義、狙い
1.3　本稿の構成と諸論点の布置
1.4 本稿のメタ理論性
第 2 章　社会記号論系翻訳論―理論研究とメタ理論研究の記号論的基礎
2.1　はじめに―社会記号論の適用可能性の主意
2.2　パース記号論による言語の意味の一般原理とコミュニケーション観
2.3 記号論による翻訳の一般原理
2.4 認知言語学系意味づけ論から見た翻訳の意味構築性
2.5 社会記号論から見た等価構築の社会指標性と象徴性
2.6 社会記号論の再帰的帰結と記号論の諸展開―社会記号論系翻訳論
第 3 章　言語等価論―翻訳等価性の諸概念
3.1　はじめに
3.2　等価前史と翻訳等価性への諸アプローチの社会文化史
3.3　翻訳等価
3.4　翻訳シフト
3.5　翻訳ストラテジー
3.6　翻訳プロセス
3.7　等価学説の社会的機能
第 4 章　翻訳等価性をめぐる諸アプローチ
4.1　社会等価論―社会行為性を加味した言語分析の諸学説
4.2　等価誤謬論―社会文化的コンテクスト中心の翻訳分析の諸学説
4.3　等価超越論―翻訳哲学・翻訳思想
4.4　等価多様性論―翻訳テクスト・コンテクストの多様性
第 5 章　翻訳等価性をめぐるイデオロギー
5.1　研究者のスタンス、イデオロギー
5.2　社会記号論と翻訳研究の全体
第 6 章　結―等価構築論からの翻訳学の検証

（2）論文の内容要旨

本稿は「翻訳とは何か」という根源的な問いに対し、「翻訳とは、等価構築行為である」と措定し、主にこれまでの西洋の翻訳研究者による翻訳諸理論の背後に潜む言語や翻訳に対するイデオロギー（意識）を分析することで、当該テーゼの理論的検証を社会記号論に基づいて行う。その中で、翻訳学の諸学説を分析するメタ理論のあり方を素描することを目的とする。

本稿の出発点でもあり、再帰する点でもある＜翻訳等価構築性＞の概念定義

は次のとおりである。「翻訳とは、当該行為の社会文化史的コンテクスト依存性（社会指標性）および翻訳者のイデオロギーや価値観（象徴性）を不可避的に内包しつつ、ある言語テクストを基に別の言語テクストへと社会的な等価構築を行う、非合目的的効果を伴った行為である。」

＊

この＜翻訳等価構築性＞を再考するために採った本稿の構成は次のとおりである。

本稿は翻訳学ないし翻訳研究のメタ理論研究を行うことを目的としているため、まず第 1 章でメタ理論として援用する言語人類学系社会記号論の妥当性について科学哲学や知識社会学の見地から検討する。

次に、メタ理論を行うには翻訳概念を根本的に支える言語、コミュニケーション、記号、意味などの諸概念についても併せて論じてゆく必要がある。そこで第 2 章においてこれら諸概念を包括する研究分野である記号論を説明し、必要に応じて認知言語学・意味づけ論を導入しつつ、それだけでは限界があって捉えきれない翻訳の社会行為性（特に創出的な社会指標機能）に照射して議論を展開するために「言語人類学系社会記号論」の枠組みを示し、それを応用した翻訳理論の分析手法を素描する。そしてこのような作業を通して「翻訳等価構築」「翻訳イデオロギー」に関するテーゼを定立する。そして、この理論的な枠組みに依拠して、これまでの翻訳諸学説をすべて＜等価構築＞の視点から、「言語等価論」およびその展開としての「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」という分類で検討し直す。

まず第 3 章では、翻訳の言語テクストの側面に焦点を当てて諸学説を展開している「言語等価論」を取り上げる。ここではまず、3.1 で導入的な等価性全般の議論を行い、3.2 で近代以前の直訳 vs. 意訳の二項対立図式やこれまでの諸学説の社会文化史を広く説明する。次に、3.3「翻訳等価」、3.4「翻訳シフト」、3.5「翻訳ストラテジー」、3.6「翻訳プロセス」という論点の順に諸理論を分析・批評する。翻訳というコミュニケーション出来事において語用論的・機能的等価を構築するために、コードレベルで二言語がどのように「シフト」しているのか、また効果的に等価を構築するための「ストラテジー」にはどのようなものがあるのか、そして等価構築のための「(認知）プロセス」はどうなっているのか、という諸論点である。最後に等価学説の社会的機能について、動的等価論を取り上げて検討する。

次に、第 4 章では以下の「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」の諸学説を分析・検討する。まず、4.1 で翻訳を社会行為として見る視点から諸学説を展開している「社会等価論」を取り上げる。これには「テクストタイプ論」「目的（スコポス）理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」などを論点として取り上げる。これらは主に目標言語文化のなかで翻訳がどのような社会的機能を有するかを論じる学説群である。

次に、4.2 で文化的・イデオロギー的転回を遂げたとされている翻訳学の諸学説群である「等価誤謬論」を検討する。これは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテクストのほうへ向けた学説群で、「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の（不）可

視性」「倫理性と異化翻訳」「翻訳の権力ネットワーク」などを取り上げる。これは翻訳学における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」であると本稿では位置づけられる。

さらに、4.3 では「等価超越論」と題し、翻訳が前提とする意味の伝達という前提的イデオロギーを原理的に問い直す知的運動として考えられる翻訳哲学や翻訳思想が扱う問題系を取り上げる。等価概念では解決のつかない言語の「他者性」「異質性」「よけいなもの」とどのように向き合い超克するか、等価をどう超越するかという点に、翻訳者の使命があると考える地平が「等価超越論」である。

最後に 4.4 で、翻訳をめぐるテクストとコンテクストの多様性に焦点を当てた、「等価多様性論」について見てゆく。テクストに関しては翻訳の分野・ジャンルの多様化に伴って、翻訳等価のあり方が多様化していることを中心に、いくつかのジャンルの特殊性について言及する。コンテクストの多様性は、主に翻訳史という時間軸と、地域別という空間軸との様々な交点が織り成す多様性であるが、本稿ではその論及の可能性を示唆するに留める。

これらの議論を受けて、第 5 章では翻訳等価性、つまりは翻訳自体をめぐるイデオロギーについて検討する。まず 5.1 で、研究（者）の立ち位置やスタンス、目的や達成しようとする理論的機能などによって翻訳や等価性に関する概念化（カテゴリー化）が異なることを指摘し、記述的翻訳研究の非中立性・イデオロギー負荷性などを見る。そのうえで、関与的・介入的翻訳研究のアプローチをいくつかの類型に分けて分析する。そして、5.2 でこれまでの諸理論の相対化を図りつつ全体の布置を素描する。最後に第 6 章として、社会記号論に依拠した言語記号の多層的機能について確認しつつ、翻訳メタ理論研究の課題の検証と今後の展望について述べる。

以上のように翻訳研究の諸学説の＜全体像＞を見据えたうえで、本稿が分析・検討する翻訳等価に関する諸学説が、単に時代遅れの等価本質論であり、無意味なものであると周縁化するのではなく、＜等価構築＞という観点から、翻訳行為の社会文化史的コンテクスト、翻訳者・翻訳研究者の言語・翻訳イデオロギー、翻訳テクストの等価構築性の三側面の有機的な相互連関を考えながら、「社会－翻訳者－言語」の関係性の原理的な解明を行う視点に立ったうえでの「翻訳等価論」を検証しつつ、新たな論を構築してゆく可能性を展望するのが本稿の趣旨である。

結論は以下のとおりである。

1．ミクロレベルの翻訳テクストについては、$TT^e = f(s, t, i)$ において、翻訳テクスト (TT^e) は (s) 起点テクストを指標し、(t) 目標言語内の他の類似するテクストを指標し、さらに (i) メタ語用的円環プロセスのなかで自身のコ・テクストをも指標し（自身が属するジャンルや自身のアイデンティティを指標し）、詩的機能を反映した等価な翻訳テクストを構築してゆくのが翻訳行為である。つまり、翻訳は三面的間テクスト性の指標性（精確には指標的類像性）をもった、弱い儀礼性のある行為であることが確認された。この指標の三面性が

翻訳を翻訳たらしめる最大の特徴であり、この 3 つの指標性の交点がメタ語用的フレームとなって立ち現れ、理念的にはこの 3 変数の函数として捉えられる。そして、社会記号論では、この f、つまりメタ語用解釈によるテクスト化の機能（メタ語用論的編成力）として、数多くの社会機能性が同時多発するのが言語コミュニケーション行為の実際であると言われている。ところが、翻訳研究の文脈において、認知的・語彙意味論的側面の類像的な等価構築行為のあり方に翻訳研究者の意識は集中しがちであることが確認された。翻訳研究においても、社会指標性（前提的指標と創出的指標）と象徴性（翻訳イデオロギー）が必然的に負荷となってメタ語用論的編成力に影響することを理論化する必要があることについても了解された。

また、専ら翻訳の合目的性に焦点を当てる学説、翻訳者コミュニティ内の規範に焦点を当てる学説、あるいは翻訳の非合目的性・イデオロギー性を前景化させてその改善を図る社会改良主義の学説、起点＝目標の二項対立や意味の伝達自体を脱構築・解体する哲学・思想系の学説など多岐に亘る学説が数多く提出され続けている。しかし、社会記号論を土台に、翻訳出来事のいま・ここを基点にした翻訳論を展開し、各論点の展開と諸論点間の体系化を図ることで、諸説が翻訳行為あるいは翻訳を取り巻く社会文化史的コンテクストという全体の布置のなかでどのような位置を占めるかについても論じた。

２．翻訳をめぐるマクロレベルの社会文化史的コンテクストをも射程に入れると、翻訳の多次元的等価性は、（１）テクスト・言語・社会の社会的階層内でのインタープレイ、及び、（２）起点テクスト・目標類似テクスト・翻訳者個人の文体の指標的類像性を反映したインタープレイによって錯綜しながら生起する。そのことを前提にして翻訳出来事の一回性・固有性によって翻訳テクストが一回一回構築され展開されるという理論構成をとれば、翻訳をめぐるテクストとコンテクストの架橋が十全に行える理論的枠組みが提示できることが本稿の結論となる。また、（１）のマクロ社会的な要素と、（２）のミクロ社会的なテクスト要素に対する翻訳研究者の合理的な認識・解釈は（１）と（２）とで齟齬を生じ、特に異化などの翻訳ストラテジーに関する翻訳諸理論は（１）と（２）の関係性をより大きな社会文化史的コンテクストから眺めることで正当に評価しうることも確認された。

＊

最後に、異文化コミュニケーションの一環としての「翻訳」。異質なものとの安易な妥協ではなく、他者の異質性にも自己の異質性にも忠実にあるべきという倫理を掲げて翻訳に取り組むことは、自立的かつ創造的に、多文化・多言語である世界の多様性を維持していく上でも、自分の中にある多様性を育む上でも大切な営みであることを本稿の結論として展望する。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は、翻訳学(translation studies)における中心的課題といえる「等価」(equivalence)を取り上げ、諸学説を社会記号論に依拠して分析した翻訳学のメタ理論研究である。

海外では早くから翻訳学が盛んであるが、「等価」の問題は常に論じられてきた。翻訳は起点言語で書かれたテクストを目標言語テクストで表現する営為であり、起点テクストの内容が、目標言語において完全に同じ意味を持つテクストに再現可能か否かは問題になって当然である。言語が文化を内包していることに鑑みれば、そしてそれぞれの言語は固有の世界を有していることを考えれば、訳出された言語が原文と同じ意味、すなわち「等価」であることは厳密にはありえない。翻訳不可能説が生まれる所以である。それでもメッセージを異言語に翻訳する必要性が存在する限り、翻訳者は、限りなく「等価」を求めて、異言語間を橋渡しする作業に呻吟する。

従って「等価」の問題は、起点言語を重視して忠実性を追究し異質な要素を残すのか、目標言語の読者に受容されることを一義的な目的として自由な訳を許容するのか、という議論をも生み出し、「等価」は翻訳研究にとって永遠のテーマだといえるが、翻訳研究者の中には、等価を巡る議論は既に出尽くしたと考える向きもある。そのような中、「等価」に関する翻訳研究者の言説や理論を読み解き、背後に潜む言語イデオロギー、翻訳イデオロギーを抽出し、社会記号論に基づいて分析したのが本論文である。

本論文の出発点は、「翻訳とは等価構築行為である」という前提である。＜翻訳等価構築性＞の概念を本論文では次のとおりに定義する。「翻訳とは、当該行為の社会文化史的コンテクスト依存性（社会指標性）および翻訳者のイデオロギーや価値観（象徴性）を不可避的に内包しつつ、ある言語テクストを基に別の言語テクストへと社会的な等価構築を行う行為である。」

本論文では、そのように定義された翻訳の概念を支える言語、コミュニケーション、記号、意味などの諸概念について論じることを目的に、これら諸概念を包括する研究分野である「記号論」、特に翻訳の社会行為性に照準を合せた論を展開するために「言語人類学系社会記号論」の枠組みを応用し、翻訳理論を分析した。これまでの翻訳諸学説を＜等価構築＞の視点から検討し、「言語等価論」およびその展開としての「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」として分類した。

その上で、翻訳自体をめぐるイデオロギーについても検討がなされ、研究(者)の立ち位置や目的、理論的機能などによって翻訳や等価性に関する概念化が異なることが明らかにされ、翻訳に関する諸理論を類型化し、相対化することにより翻訳メタ理論研究の課題の検証と今後の展望について述べられている。

本研究の結論として、以下の点が挙げられている。

まず、翻訳行為とは、翻訳テクストが起点テクストを指標し、目標言語内の他の類似するテクストを指標し、さらに自身が属するジャンルや自身のアイデンティティをも指標する、詩的機能を反映した等価な翻訳テクストを構築するも

のである。すなわち翻訳は、三面的間テクスト性の指標性をもった、弱い儀礼性のある行為である。この指標の三面性が翻訳を翻訳たらしめる最大の特徴である。

翻訳研究の文脈においては、認知的・語彙意味論的側面の類像的な等価構築行為のあり方に翻訳研究者の意識が集中しがちである点が確認された。そこで翻訳研究においても、社会指標性と象徴性（翻訳イデオロギー）が必然的に負荷となりメタ語用論的編成力に影響することを理論化する必要があることが提案されている。さらに、社会記号論を土台に、翻訳という「コミュニケーション出来事」（communicative event）のいま・ここを基点にした翻訳論を展開し、各論点の展開と諸論点間の体系化を図ることで、諸説が翻訳行為、あるいは翻訳を取り巻く社会文化史的コンテクストという全体の中でどのような位置を占めるかについても、考察がなされている。最終的に本論文では、翻訳をめぐるマクロレベルの社会文化史的コンテクストをも射程に入れ、翻訳の多次元的等価性は、（１）テクスト・言語・社会の社会的階層内でのインタープレイ、及び、（２）起点テクスト・目標類似テクスト・翻訳者個人の文体の指標的類像性を反映したインタープレイによって錯綜しながら生起する、と分析する。同時に、マクロ社会的な要素と、ミクロ社会的なテクスト要素に対する翻訳研究者の合理的な認識・解釈が齟齬を生じる可能性を秘めており、特に異化などの翻訳ストラテジーに関する翻訳諸理論はマクロ社会的な要素と、ミクロ社会的なテクストの関係性をより大きな社会文化史的コンテクストから眺めることで正当に評価しうるとしている。

その前提をふまえ本論文は、翻訳出来事の一回性・固有性によって翻訳テクストが一回一回構築され展開されるという理論構成をとることで、翻訳をめぐるテクストとコンテクストの架橋が十全に行える理論的枠組みが提示できることを結論とする。

（２）論文の評価

本論文は、以下の点で評価できる。

第一に、翻訳学の核となる「等価」の問題を、「翻訳とは等価構築行為である」と明確に位置づけて正面から扱っていること。これは余りにも自明であるゆえか、これまでの翻訳研究において明示的に議論されてこなかった点であり、翻訳学を深化させる上で有意義な研究となっている。

第二に、これまでの翻訳研究における「等価」をめぐる諸学説を批判的に考察し、「言語人類学系社会記号論」の枠組みを用い、翻訳の社会行為性に照準を合せ、翻訳理論を分析したこと。言語人類学系社会記号論を援用した翻訳研究は希少であり、本専攻からわずかに出ているものの、翻訳理論そのものの分析に用いた研究は海外においても見られないものである。

第三に、翻訳等価性、すなわち翻訳自体に潜むイデオロギーを諸学説からあぶり出し類型化したこと。たとえば目標言語文化のなかで翻訳がどのような社会的機能を有するかを論じる学説群として、「テクストタイプ論」「目的（スコポス）理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」を「社会等

価論」として分類、翻訳行為を社会的・文化的・政治的コンテクストの面からとらえた学説群として「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の（不）可視性」「倫理性と異化翻訳」「翻訳の権力ネットワーク」などを「等価誤謬論」として分類、等価概念では解決のつかない言語の「他者性」「異質性」「よけいなもの」とどのように向き合い超克するか、等価をどう超越するかという点に翻訳者の使命があると考える学説を「等価超越論」とするなど、斬新な視点からの翻訳理論再構築が行われている。

ただし、指摘すべき問題点もある。

言語人類学の枠組みを参照枠としているにもかかわらず、また、民族誌的アプローチを推奨している文言が論文中に散見されるにもかかわらず、この論文自体には民族誌的な記述が乏しい点。

構築主義的な歴史記述は、歴史記述というものの発話行為性（遂行性）や構築性が再帰的に認識されるところから出発する必要があるにもかかわらず、構築主義を標榜しているはずの著者自身による翻訳史記述が実証主義的（ないし思想史・文献学的）である点。

上記の２点は、本研究を今後さらに進めていくにあたり留意すべきことである。

このように本研究に今後への課題は残されているが、前述した独創性は、それを補って余りあるものである。本論文は、熟考された研究テーマの設定、翻訳についての深い洞察、記号論、言語人類学系社会記号論、認知言語学、意味づけ論などを駆使した壮大なスケールのメタ翻訳理論研究であり、国内外における翻訳学の今後の発展に大きく貢献することが期待される。